

フランスで今、話題となっている日本人女性がいる。アコーディオン奏者、伊藤浩子だ。「津軽三味線の大会に、フランス人の演奏者がメインで立つようなもの」

9月に行われるフランス最大規模のアコーディオン・フェスティバルのメインゲストに選ばれたことを伊藤は、そう語る。

フェスティバルは、フランス中南部、磁器の産地リモージュに近いチュールで開かれる。期間中は、メインステージだけでなく、カフェや街角にまでアコーディオンの音色があふれ、世界中から一流のアコーディオニストが集まってくる。

「今回はソロではなく、フランスでも実力派の男性アコーディオニスト3人とカルテットを組んで参加します。リーダーとして自分の作品やアレンジ曲も演奏します」(伊藤)

アコーディオンと出会う

伊藤とアコーディオンの出会いは、小学校の音楽の授業で弾いた鍵盤アコーディオンだった。「明るさと悲しさが響きあうような音に魅了され」、教室へ通い始めた。幼少時からピアノを習っていた伊藤にとって、鍵盤アコーディオンはなじみやすか

ったが、上級レベルまで教えられる指導者がいなかったため、アコーディオンから離れ、伊藤は国立音楽大学のピアノ科へ進んだ。

音大卒業後、知人を通じてアコーディオン奏者のcobaと知り合う。鍵盤アコーディオンの手ほどきを受け、森繁久彌主演の「屋根の上のヴァイオリン弾き」の舞台にも立った。

やがて、ジュリエット・グレコの伴奏者としてマルセル・アゾラが来日した時に、伊藤は初めてボタンアコーディオンの音色に触れる。ボタンアコーディオンは左右



「メロディック・ボック」を率いる伊藤浩子
多国籍ユニット

それぞれに100近くあるボタンを押し、そこに空気を送り込むことで音を出す。右手がメロディー、左手が伴奏を弾くという仕組みは一緒だが、ボタンアコーディオンの右手部分は、鍵盤アコーディオンの2倍近い音域を持つ。その表現の自由さに伊藤は魅了される。「自分は生徒をとらない」というアゾラからパリ在住の名手ジョエ・ロッシを紹介され、手紙の返事もな

タンアコーディオンの奏者として活動を続けてきた。

今回のアンサンブルをプロデュースしたパトリス・ペリエラスは「彼女の異質さが魅力だった」と語る。ペリエラスは、日本では劇団四季や石丸幹二らの音楽プロデュースで知られる、

作曲からアレンジまで行う音楽家だ。

マイノリティを武器に

父親がアコーディオニストであったペリエラスは、アコーディオンにはひととき思い入れがあるという。大事なプロジェクトのリーダーに、「日本人」で「女性」である伊藤を抜擢した理由は何かだったのか。

「ヨーロッパ人から見ると、ヒロコの作風には、日本音楽の要素が親しみやすい形でちりばめられています。同時に日本的なモチーフだけを主張するのではなく、ヨーロッパ的な要素と調和することで、曲調を豊かなものにしていく」(ペリエラス)

思えばフランス人は、亡命作家やアーティストを寛容に受け入れることで、自国の文化に刺激を与え、豊かにしてきた。

アコーディオンもまた、19世紀のパリにイタリア移民が持ち込んだもの。ダンスホールが隆盛を迎える社会の中で、シャンソンと並んでフランスを代表する音楽になったのだ。

「文化の多様性を受け入れる楽器。日本人で、女性である自分ならではの音楽を伝えていきたい」と伊藤は言う。(文中敬称略)

ライター 矢内裕子

渡仏30年目の快挙

「小さなオーケストラ」奏でる

「小さなオーケストラ」と呼ばれるボタンアコーディオンに魅せられた日本人女性のアコーディオニストが、大抜擢で世界の檜舞台へ。